

Christopher H. Johnson

Utopian Communism in France.

Cabet and the Icarians, 1839-1851.

谷 口 健 治

フランス社会主義の観察者(或は監視者)ローレンツ・シュタインは一八四二年にこう書いている。「共産主義運動は一八三九年以来急速に成長しながら、フランスのあらゆる州、無産者のあらゆる階層に広まっている。」その共産主義の「最大の部分を、今日では明らかに狭義の共産主義者、即ち自称イカリヤ共産主義者が形成している。この部隊の創始者はカベである。」「かなり確かな徴候から見てイカリヤ共産主義は大方の所で他党派を断固圧倒している或はしつとあると推測される。」エティエンヌ・カベ(Etienne Cabet, 1788-1856)の共産主義運動は一八四〇年代にフランスの労働者から最大の支持を得ていた。多くの同時代人がシュタインのこの観察と同趣の証言を残している。辛辣を以て鳴るエンゲルスでさえ「フランスのプロレタリア大衆の定評ある代表者カベ」と手放しの評価ではないか。しかし、今日一般にカベは忘れられた存在となっている。カベに割当てられるのは傍流の空想的社会主義者の席と相場が決まっている。一例として坂本慶

一氏『マルクス主義とユートピア』から引用させて頂く。「平等主義を核とする共産主義の流れの中に、『イカリヤ旅行記』によって『共産主義』の用語を大衆化したエティエンヌ・カベがいる。〔……〕カベの思想は、キリスト教的な平等・友愛の基礎のうえに、バブーフ、オーエン、サン・シモン、フリエラの諸思想を加えた、一種の折中的な思想であって、革命よりもユートピアに力点が置かれている。」(四七頁)といったって素気無い。

単なる空想的社会主義者カベという今日の評価と大衆的な共産主義の指導者カベという同時代人の印象との懸隔は大きい。この隔りを齎したのは何か。差当り次の事情を指摘することが出来る。一つはカベが『イカリヤ旅行記』以外に目立った或は目に見える遺産を残していないこと。カベがトマス・モアの『ユートピア』に着想を得て著わしたこの冒険小説(Prudhommeaux)によれば登場人物は『新エロイズ』からの借物)は、「共有制の可能性・有用性を確信させるためその例を示す」ことを目的に、完成された共産主義社会の生活を詳述している。そして確かにその多くの局面はユートピアの相貌を帯びている。もう一つの事情はこれまで殆どの研究者が依拠してきたJules Prudhommeauxのカベ伝(*Icarie et son fondateur Etienne Cabet*, Paris 1907)の視座という問題である。彼は純政治的な社会主義に反対している人々に、彼等の先駆者としてカベを示そうとした。彼にとってカベは、共有制社会を実験して見せることによって社会主義を実現しようとした人物なのである。従って彼の七〇〇頁に及ばんとする著書の大部分は、『イカリヤ旅行記』の中に提示された未来社会の青写真の成立過程と内容の分析、並びに合衆国中西部に於ける

イカリア派入植活動の叙述に割かれている。逆に『旅行記』（一八三八年完成、四〇年出版）と入植運動の開始（一八四七—四八年）との間に位置する一八四〇年代のカベに就ての詳論は欠落している。こうして単なる空想的・実験的社会主义者カベの姿が前面に出て来る。社会主义の書としても殆ど獨創性を欠く『イカリア旅行記』や、オーウェン、フーリエという偉大な先行者を持つ実験社会主义からカベをイメージする限り、二流の空想的社会主义者という像は動かし難いものに見える。

確かにカベは一面ユートピアンである。又それが強調されることも全く故無しとはしない。しかし同時代人はカベのもう一つの面、当時の最大の共産主義運動を率いているカベを目にしている。この目撃は虚妄に過ぎないのだろうか。否。既に地方史のレビューや個別的局面では、イカリア共産主義が七月王政下の各地の労働者の運動に多大のインパクトを与えたこと、このことが確認されつつある。そして今我々は Christopher H. Johnson の、政治家・大衆運動指導者としてのカベに焦点を当てた、一八四〇年代のイカリア共産主義運動に関する包括的な研究 *Utopian Communism in France. Cabot and the Icarians, 1830-1851, Ithaca and London, 1974* を手にしている。専門を異にする評者ではあるが、初期社会主义に関心を持つ者として、残されたカベ文書に基づき手堅く既成のカベ像の修正を迫っている本書を紹介するため、敢て筆を執る次第である。

一八四七年末から四八年初めにかけてカベは秘密結社活動と詐欺の容疑を受け、彼の膨しい書類が押収された。この書類の残片

は現在アムステルダム の国際社会史研究所とパリ市歴史図書館に保管されている。著者 Johnson (フリップの紹介によれば現在デトロイト近郊ウエイン州立大学助教授) はこれらの文書を中心に研究を進め、夙に三篇の論文 ("Cabot and the problem of class antagonism," *International Review of Social History*, Vol. 11, 1966, "Deux lettres inédites de cinq ouvriers lyonnais à Cabot et Dézamy," *Revue d'Histoire Économique et Sociale*, Vol. 47, 1969, "Communism and the working class before Marx: The Icarian experience," *American Historical Review*, Vol. 76, 1971) を物している。本書はこのカベ研究の集成と言える。以下本書の概要を示すことにしよう。

著者は先ず序文に於て基本姿勢を明らかにする。著者の窮極的関心は、資本主義の衝撃に遭遇し伝統的社会から脱皮しつつある過渡的社會に置かれた労働者階級的情況、これに肉迫することである。そのための一つの手段としてイカリア共産主義の分析が取上げられる。この立場からして著者はカベティズムを思想としてではなく運動として、カベの教説と主に労働者から成るカベ支持者の反応との相互作用として解明せざるを得ない。そしてその中で、最初の労働者党を形成しつつある卓抜な組織者・宣伝家カベ、現実政治家カベの姿が浮かび上がるといふわけである。

第一章は一八三九年カベが共産主義者としてデビューする迄の経歴を、政治的な手腕と体質の生成という面を中心に論じている。本書の構成上からは予備門に当る章であるが、余り名の売れていないカベの小伝を兼ねるといふ含みで扱う。カベは一七八八年ブルゴーニユのディジョンに樽作の親方の息子として生まれた。法

律学校を卒業後一八二二年に弁護士開業。復古王政期に入り、追及を受けていたボナバルト派大立物の弁護を担当、無罪を勝取って地方法曹界に名を成す。しかしこのため王党派から逆襲を受け一八二〇年にパリへ去る。パリでカベは野党勢力の指導者達と親しい弁護士秘書に納まり、彼等に接近。翌二年には彼等と共にカルボナリに加盟、右派マニユエル派の連絡役としてバザールら若き共和主義者達と争う。この秘密結社の中でカベが示した組織力に、著者は留意を促している。一八二七年カベは最初の重要な政治論文を執筆。Prudhommeaux は一八二〇年代のカベの政治的立場に就て口を濁しているが、著者はこの論文に基づいてはつきりカベをオルレアニストと規定する。一八三〇年の革命に際してカベは正に主流派にいた。そして間も無くコルシカの検事長を拜命。しかし革命後オルレアニストの一部は新体制から離れ、共和主義に鞍替を始める。カベもこの流に沿って検事長を辞任、故郷の選挙区から代議院選挙に立候補して議席を得る（一八三一年）。しかしカベは精力を院外活動に振向ける。一八三三年二月 Association Libre pour l'Éducation du Peuple の書記長に就任、同年六月には第一次『ポピュレール』紙（週刊）創刊等。著者はこの時期のカベの戦略が全共和派の団結にあったことを強調している。カベの幅広主義既に明瞭という次第。一八三四年カベは『ポピュレール』の記事によって出版法違反の判決を受け、最初ブリュッセル、ついでロンドンへと亡命する。五年に亘るカベのロンドン時代に就ては、史料欠如のため著者も多くを明らかにしていない。しかしこの時代はカベの人生に於ける一大転換期である。この地でカベはブルジョワ共和主義から共産主義へ起死回

生の大跳躍を行った。その成果をカベは、ロベスピエールを共産主義の先駆者に祭上げた『フランス革命民衆史』（一八三九—四〇）、『イカリア旅行記』という形で公表している。著者も『旅行記』へのコメントを行っているが、その紹介は割愛する。

第二章はカベの共産主義者としての帰国から、イカリア派の拡大が始まる迄の時期を扱う。著者はカベの本格的活動が始まる一八四〇年を、東方問題に絡む政治的危機の年、パリ・ゼネストによって社会問題が時事問題として登場した年、ネオ・バブーフ主義を主流とする共産主義が公衆の前に大きく姿を現わした年と捉える。この危局の中でカベはブルジョワ共和派『ナンシヨナル』紙との熾烈な論戦、秘密結社方式で革命を目指すネオ・バブーフ主義に対するに非暴力主義・合法主義の共産主義の唱道、こうした活動によって地歩を獲得する。続いて一八四一年三月の第二次『ポピュレール』（月刊）創刊によって、又シャルル・シャムロワ等巡回宣伝員の活動によって、カベの支持者は各地で拡大し、一つの運動を形成し始めた。ところでカベの共産主義運動を支えた主要な宣伝手段は、この機関紙『ポピュレール』と、殆どカベが一人で書き捲った膨しいパンフレットの類である。著者は一節を設けてそのカベの宣伝技術、宣伝スタイルの現代性・煽情主義を明らかにしている。

第三章はカベの政治戦略と一八四一—四五年に於けるその展開とに関するものである。著者はカベの基本的戦略が、(i)全左翼・共和主義者の統一戦線、(ii)その統一戦線内で発言力を保持するための共産主義内部での隊列引締め、この二点にあると考えている。共和派統一戦線論は一八四三年のトゥールーズ裁判問題（同地で

イカリア派を含む左翼の一団が逮捕された事件。カベは弁護に赴くが、弁護人としての入廷を拒否されて問題となる。よってその有効性が実証されたかに見え、又この事件を機にイカリア派は急激に膨脹する。しかし(ii)の点は当初から問題性を露にしていた。この戦略のため、己の指導権と理論的統一性を掃るが者に対するカベの態度は峻烈を極める。一時カベの副官を務めたことのあるラオティエールやデザミとの論戦は中傷合戦へと拗れている。カベの教説を支持する労働者もこれと無関係ではいられない。著者はリオンを例に取って隊列引締めが運動の基底部に影響を及ぼす過程を描いている。一八四二年デザミとの論戦に際し、カベの理論に賛意を表しつつも罵詈謗を諫止したグループが分離を余儀なくされ、更に一八四四年専らカベの統制権を問題にして一隊が分離。こうしてリオンには正統イカリア派と分離派イカリア主義者が並存することになる。著者は、このように教説への賛同者さえ排除せざるを得ない運動の閉鎖性という問題を指摘することで、後論への伏線を張る。

第四章は他の章とは異なつてイカリア共産主義の静態的分析である。初期的政治運動に就てのこの種の分析は通常困難を極めるが、著者は有力な手懸を見出している。カベは律義にも一八四三年十月以来定期的に機関紙の発行部数を公表していた。著者は僅にブルジョワ新聞の発行部数に匹敵するこの数を表示した上、実際の読者（信奉者と発行部数との比（一部の予約購読を何人かで分担するのが常態）を二〇対一と見積つてみせる。つまり一八四五―一八六六年頃のイカリア派は六―七万人を擁していたというわけである。更に著者は、同じくカベが一八四六年に公表した都市

別・県別予約購読者数の表を転載して、カベが農村部、新興の工業地帯で支持者を欠き、逆に地方都市の中に多くの信奉者を見出していたことを指摘。又イカリア派の職業分析からは、カベの支持者の大半が手工業者を中核とする一八四〇年代に於ける意味での労働者であることが明らかにされている。続いて著者はこれらの労働者の置かれた状態の叙述、イカリア派自身が語るカベリズム支持の動機を紹介へと進む。その後パリを中心に多くのイカリア派を出した仕立屋、靴屋、指物師等の手工業者の情況に照明を当て、最後に地方に於けるイカリア派の中心地と考えられる八つの都市、ヴィエヌヌ、ランス、リオン、ナント、ニオール、ペリグー、トゥールーズ、トゥーロンに就て支持者拡大の要因を検討している。

第五章のテーマは「運動から宗派へ」である。イカリア共産主義は、元々合資会社『ポピュレール』出版社と全国的な『ポピュレール』の「通信員」網、この二つの組織に支えられた相当な統合性を備えた運動である。更に著者によれば、信奉者の地域的紐帯は勿論、一種のイカリア派「文化」さえ育まれていたという。この運動の統合性と宗派化との連関を詳らかにしないまま、第五章の叙述は統いてイカリア共産主義の運動から宗派への変質を取上げていく。この変質過程は、(i)『レフォルム』派の共産主義拒絶に触発されてイカリア派の排他主義が強化される時期（一八四五年九月―一八四六年春）、(ii)カベの『真のキリスト教』と題する著書の出版によってイカリア派の宗教的意識が昂揚し、カベ崇拜の風潮が胚胎する時期（一八四六年春―一八四七年春）、(iii)一八四七年五月カベが衝動的な移住宣言（未開地へ大挙移住して共産主義國

家を建設しようという呼掛け)を発表、これによってイカリア共産主義が、熱狂的にカベの教説を支持し盲従する宗派的イカリア派と、移住に反対しカベに対しても距離を置く部分とに分化する傾向を強める時期、この三段階に別けて詳述されている。ところで著者は、この宗派化を促した要因として、一八四六年の不作に続く経済的危機、労働者の間での革命的傾向の復活という外的事情もさりながら、カベの基本的戦略の破産という問題を重視している。著者によればカベの当初の戦略は共和派統一戦線、ブルジョワジーとの協調であった。しかしこの戦略は『レフォルム』派との論争によって頓挫を来す。カベはこの論争の過程でブルジョワジーへの警戒、労働者の連帯を求め、更にはブルジョワジーとプロレタリアートの利害の対立を認知する方向に進む。こうしてカベは古い非暴力主義・階級協調路線を維持するか(それは彼の教義の看板である)、それとも新しい認識に基づいた階級闘争・革命の方針を採用するかというジレンマに立たされる、と著者は言う。カベはこのジレンマを逃れるため、原始キリスト教Ⅱ共産主義という等式の殊更なる強調へ、更にそれによって宗派的熱狂が高まると、全信奉者を率いての「イカリア」移住宣言へと突き進んで行く。評者は若干の批判を留保するものであるが、第四章と並んでこの宗派化過程の分析が本書の圧巻を成すとしたい。

多くの社会主義者にとって、一八四八年の革命は突然の出来事だった。カベにとっても然り。しかしカベは逸早く革命に対応、革命の初期の段階では鋭い政治感覚を取戻して大きな比重を占める。他党派に先駆けた臨時政府支持、国民衛兵問題の重視、三月十七日デモの指揮等。しかし四月に入るとイカリア派は反共攻撃

の矢面に立たされて崩壊し、カベは立憲議会選挙に落選する。以後イカリア派は新大陸の共産主義入植村に夢を托す小宗派に転落、カベも十二月にアメリカへ向う。第六章はこうした革命の渦中のイカリア共産主義を扱っている。そしてここで著者が呈示するカベの共産主義の功罪、即ち分離派をも含めた広義のイカリア主義者が革命の中で占めた重要な役割、逆にカベの非暴力主義・合法主義が労働者の非戦闘性を助長したという事態、共に一八四〇年代に於けるカベの影響力を物語っている。

跋文は一八四九年以後のイカリア派の運命に触れた後、嘗てカベを支持した労働者の多くが協同組合運動へ流れたことを指摘、カベの非暴力主義・合法主義がここに一つの帰結を見出したことを明らかにしている。「どんな歴史家もこの男(カベ)がヨーロッパ史上最初の大規模な共産主義労働者『党』を形成したことを無視出来ない」(p. 267)。これが本書の結論である。

評者はこの結論に異を唱える心算は更にはない。仮令その意図ありとしても、史料を殆ど手にしていない評者にそれは不可能な事である。又浅学にしてイカリア共産主義の興隆を齎した社会的経済的背景に就て著者が披歴している知見の当否を論ずることも手に余る。ユートピアそれ自体を果して同時代人の願望の集約と理解して良いか、労働者階級の具体的状況を説明することの先には何があるのか、といった類の穿鑿はここでは無用であろうし、著者がセクト性を疑似キリスト教化、千年王國的傾向と狭義に解して、社会的な意味でのセクト性、大衆運動そのものが孕んでいる精神的硬化化への傾向という問題を後退させていること等にも

立入るまい。唯、次の二点に就て評言を付しておく。

先ず著者がカベの思想に触れた多くの論者に倣ってカベの思想の分析は「殆ど行なうに値しない」としていることに就て。確かにカベの思想の多くは借物である。しかしカベが提示した共産主義の綱領の中に見逃せない点が一つある。即ち政治体制としての民主主義の獲得↓過渡期体制による私的所有・私的企業の包囲↓共産主義社会の実現という方策である。評者はカベの『共産主義の信条』の末尾を飾るこの方策が共産主義者同盟の信条草案を経て『共産党宣言』に連なっているのではないかと推測させる若干の徴証を知っている。

第二点は本書の内容に直接係わる。即ち第五章の内容として紹介したカベのジレンマの問題である。著者はこの論を展開するに際して、労働者とブルジョワジーとの階級対立の承認は必ず階級闘争論に繋がり、逆に階級協調論は必ず利害対立の認識を欠くという大前提から出発している。著者は確かに『ボビュレル』の記事によって丹念に論証しながら、カベがブルジョワジーからの協力に失望の念を強めるに連れて労働者階級の連帯を強調する姿勢へ傾いて行ったという新しい事実を示している。しかしそこからカベが階級闘争論を採用しなければならぬ事態に直面したと直ちに結論することが出来るだろうか。社会の中に階級対立のあることを労働者は身を以って知っている。又連帯の必要性を訴えもする。しかし差当りは市民社会の中で同資格者としての地位を獲得しただけであって、ブルジョワジーの殲滅など望んではいない。賛否は別としてこのような初期労働者運動が存在した。F

イツに於けるシュテファン・ボルンの運動は正にそのようなものである。カベの courage. c.ii. の呼掛けに共鳴し、革命後は協同組合活動に走ったという多くのイカリア派の心情にもそのような含みはないだろうか。孰れにせよ著者の、階級対立の認識即階級闘争・革命の路線という大前提は妥当なものとは言えまい。従ってカベのジレンマ説も直接カベの告白が見付からない限り裏付けを欠くことになる。しかしそれではカベの突然の移住宣言(随分性急でいい加減であるとの著者の主張は説得的)をどう説明するのか。残念ながら評者に代案はない。唯この宣言以前にカベは、著者が主張するように実験によって共有制社会を実現する意志を全く持っていなかったのかと質すことは出来る。著者自身がまさにモデル共同体建設に就てのカベの動搖に言及してはいないか。著者はカベがユートピアンであり同時に実践的政治家であったことに彼の悲劇を見ているが、この見解の向を張って言えば、己の「イカリア」がユートピアであると自覚出来ない政治主義者であったことに、カベの雛形共同体に就ての、又現実政治家とユートピアンという両極間での振動の最大要因があると言えるだろう。

最後に、幾つかの瑕瑾を有するにしても、本書がマッシュヴな労働者の運動としてのイカリア共産主義という同時代人の印象を十分証左していることを再度確認して筆を擱くことにしたい。

(三四頁、一九七四年、
Ithaca and London, Cornell University Press)

(京都大学大学院生)